

人物で語る 日本デนมーカー

② 山崎延吉のぶきち I

愛知県立農林学校は、一九〇一年（明治三四年）、職員八人、生徒数百十一人で安城の地に産声を上げた。その初代校長として招かれたのが山崎延吉であった。

彼は、東京帝国大学農科大学で農芸化学を専攻し、一八九七年（明治三〇年）に同大学を卒業後、福島県立蚕業学校で教育者としての道を歩み始めた。一八九九年（明治三二年）に大阪府立農学校へ転勤し、その二年後、二十九歳の若さで愛知県立農林学校の校長として赴任した。

山崎延吉は、急激な近代化により、当時の教育が知識偏重になりつつある中で、勤労を尊び、実際に役に立つ農業教育を目指すことにした。具体的には次の三点であった。

第一は、勤労主義の教育である。それは、実習経験を通して、一生役に立つ知識と技術を身につけさせることであった。

第二は、人物主義の教育である。修身や名士の講演会を大切に考え、礼儀正しく恥ずか

しくない行動のとれる人物（古武士の風）の育成を目指した。

第三は、開かれた教育である。教育効果をあげるために、教育を学校に閉じ込めておくのではなく、社会に延長し、農村教育を進めていくことが大切であると考えた。

こうした理念に基づいて、愛知県立農林学校では農業実習が大事にされた。生徒は、実習田で苗代から収穫までを一貫して行った。また、野菜作りや果樹栽培、養蚕、養鶏も実習し、農業の新しい知識や技術を三年間で身につけた。同校の卒業生たちは、古い伝統的農法を新しい近代的農法に変えていく先頭に立つことになった。

また、卒業後に地域で活躍する人材の養成にも力が注がれた。山崎延吉は、一年から三年までの修身の授業を週一時間ずつ受け持った。教科書は使わずに、名言や格言を示し、世の役に立つ立派な人になる道を講話した。



山崎延吉肖像画（山崎文庫蔵）



現在の愛知県立安城農林高等学校

さらに、学校行事計画である「興風暦こうふうれき」を作り、それに沿って様々な行事が実施された。「生産物品評会」や「武術大会」、鍛練をねらった「雪中行軍」や「臥薪嘗胆会がしんしょうたん」などを季節に応じて行い、知・徳・体の調和がとれた人物の育成を目指した。中でも、「誠心会」のように名士を招いて講演を聴く行事は、人格形成の上で重視された。招かれた講師は、金原明善ばらめいぜん、新渡戸稲造にとべいなそう、柳田國男をはじめ、学界的権威者や各方面での著名人であった。こうして同校の教育で育った卒業生たちは、碧海郡内の農村の町村役場や農会、産業組合に勤務し、農政の指導的立場に立ったり、中堅農家として営農に携わるなど各方面で活躍したりした。これらの人たちが日本デนมーカーを生み出し、支えていったのである。

文 三上裕保